



Title	ジュディス・バトラー : 生と哲学を賭けた闘い
Author(s)	藤高, 和輝
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61442
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (藤高 和輝)

論文題名

ジュディス・バトラー——生と哲学を賭けた闘い

論文内容の要旨

本論は、ジュディス・バトラーの哲学研究である。バトラーは現代を代表するフェミニスト、クィア理論家、ポスト構造主義の思想家として広く知られている。これまでの先行研究では以上の三点に焦点を当てたものがほとんどだった。それに対して本論では、初期バトラーのヘーゲルをはじめとした（伝統的な）哲学との関わりや影響に焦点を当てて考察した。また、そこで培われた問いや思想がその後のバトラーの理路にいかに関与しているのかを、上記三点と関連付けながら示した。

第一章「コナトゥスの問い——バトラーとスピノザ」では、バトラーがいかに哲学に出会うことになったかを考察の出発点に据えた。バトラーは10代の頃、自宅の地下室でスピノザの『エチカ』と出会う。ここで取り上げたいのがスピノザのコナトゥス概念である。その概念はその後のバトラーの思索を徴候的に示しているためである。

第二章以降では、バトラーが「コナトゥスの問い」をいかに引き受け、探求したかをめぐる叙述を展開する。第二章「欲望と承認——『欲望の主体』を読む（1）」及び第三章「欲望の主体と「身体のパラドックス」——『欲望の主体』を読む（2）」では、バトラーの最初の著作『欲望の主体』（1987）を取り上げる。ここで明らかにしたのは、「コナトゥスの問い」がいかにヘーゲルの「承認を求める欲望」として探求されることになる点である。また、『欲望の主体』では、欲望、他者、承認、身体そしてジェンダーなど、その後のバトラーの思索を特徴づける概念群が提示されており、それらを横切る問題構成を把握するよう努めた。第四章「現象学からフーコーへ——80年代バトラーの身体／ジェンダー論」では、『欲望の主体』で提示されたものの深められていない「身体／ジェンダー」の問題に関して、バトラーが80年代にいかに関与したか、その時期の諸論文の考察を通して浮き彫りにした。80年代のバトラーの哲学研究に特徴的なのは、ボーヴォワールやメルロ＝ポンティを中心とした現象学を主要な関心事としている点である。バトラーの思想における現象学の影響や、あるいは現象学との対決を考察することを通して、彼女がフーコーの系譜学へと向かう道程を明らかにした。第五章「『ジェンダー・トラブル』とアイデンティティの問い」では、バトラーのもっとも重要な名著『ジェンダー・トラブル』を考察の対象に据え、それがどのような歴史的背景のもとで書かれ、何を指すものであったのかを論じた。また、ヘーゲルやフーコーの議論がいかに『ジェンダー・トラブル』の議論に引き継がれ、アクチュアルな思想として洗練されるかを明らかにした。以上を通して、バトラーが「アイデンティティの問い」をいかに引き受け、どのような「フェミニズムの政治」を求めたかを示すよう努めた。

第六章から第八章では視点を変えて、パフォーマンス性概念を軸にバトラーの90年代以降の理路を追った。バトラーのパフォーマンス理論は単に言語行為論の系譜からのみ構成されたものではなく様々な理論的背景をもつものであり、さらには『ジェンダー・トラブル』以降、様々な影響を受けながら生成・展開したものであり、一義的、統一的に理解することが難しい側面がある。そこで本論では、バトラーのパフォーマンス理論の時期や特色に焦点を当てた。第六章「パフォーマンスとしてのジェンダー」ではやや時間が前後するが、はじめて「パフォーマンス」という用語を用いた論文「パフォーマンス・アクトとジェンダーの構成」（1988）から「模倣とジェンダーへの抵抗」（1991）を取り上げ、考察した。第七章「パフォーマンス性としてのジェンダー」ではとくに言語行為論の系譜からバトラーのパフォーマンス性を考察し、さらにその差異を明確化した。第八章「パフォーマンス性、メランコリー、そして生存の問い」では、改めてパフォーマンス性を「生存＝コナトゥスの問い」として捉え返し、とくに心的な次元における「生存」を考察した。

第九章以降では改めてスピノザの「コナトゥスの問い」に立ち返り、バトラーの思索にいったん見通しを与えた。第九章「コナトゥス・承認・規範——バトラーの社会存在論」では、バトラーの思想を「社会存在論」として捉え、それをコナトゥスを軸にして明らかにし、第十章「バトラーのエチカ」では、バトラーの社会存在論が提起する倫理の問題を考察した。「結論に代えて——とり乱しの共同体へ」では、バトラーが追及する倫理的共同体を素描することで結論に代えた。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (藤高和輝)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 教授 檜垣立哉
	副 査 教授 ヴォルフガング・シュベントカー
	副 査 教授 村上靖彦
	副 査 教授 (同志社大学) 富山一郎

論文審査の結果の要旨

本論文は『ジュディス・バトラー ——生と哲学を賭けた闘い——』と題され、現代アメリカの代表的なジェンダー論、クィア・スタディーズの論者であるジュディス・バトラーの思想を、とりわけ初期におけるスピノザやヘーゲルの哲学とのかかわりをクローズアップしながら、哲学思想総体との繋がりにおいて位置づけたものであり、きわめて水準の高い議論が展開されていると評価することができる。

従来、ジュディス・バトラーの名は、第三波フェミニズム、あるいはジェンダー論の新たな展開において、現在のLGBT運動にもつながるクィア運動を支える理論的人物として知られており、とりわけ、すでに現代思想の古典ともいえる『ジェンダー・トラブル』の議論を中心に紹介、咀嚼されてきたといえる。もちろんバトラー自身がクィア運動にかかわるとともに、近年はジェンダー論を越え、さまざまな政治的運動に参加している事態を考えればそれは間違いではないし、バトラーの歴史的貢献がこの点にあることも事実である。しかしながら本博士論文は、以上のようなバトラー像を肯定しつつも、バトラー自身が、初期にスピノザの哲学思想に傾倒していたこと、また博士論文がヘーゲルの欲望の承認論に関わるものであったことに光をあて、従来必ずしも明確にされてきたとはいえないバトラーの議論の思想史的背景こそを明確にし、その上でスピノザ的なコナトゥスやエチカの議論のひとつの延長線上にバトラーの議論を位置づけたことにおおきな特徴が認められる。こうした試みは、従来看過されがちであったその思想的背景を、ポストモダンや精神分析の方向のみからではなく、より深い哲学史的な位相から浮かびあがせることを可能にするものであり、『ジェンダー・トラブル』などの主要著作を新しい視角から解読する手立てを与えるものとしても意義深いとおもわれる。

本書は序論と結論を含む一二の章から構成され、おおきく二つの部分に大別されるとおもわれる。前半をなす序章から第五章までは、すでにのべたようなバトラー初期のスピノザへの関心から、ヘーゲル論として博士論文を提出するにいたるバトラーの思想の形成の経緯、さらに、現代フランス思想、具体的には現象学、精神分析、デリダやフーコーらの議論との、受容も批判も含むさまざまな関連の諸相が詳細につづられる。そして第五章において、主著である『ジェンダー・トラブル』が、こうした一連の思想的連関においていかに描かれてきたかが明確にされてくることになる。

後半部をなすのは、これらの思想史的探求のなかでバトラーがつねに「身体」をさまざまな仕方でも焦点化し、各哲学思想がそれを捉えそこなっていることを明示しつつ、ジェンダー論、あるいはクィア・スタディーズのなかでどのようにそれが練り上げられてきたかを描きだすことにある。そこでは論述は、身体のもつパフォーマンスのあり方におよぶとともに、まさに身体を軸としてしか提示しえない社会性や、そしてその核にある生の問いを提示している。これらは、スピノザのコナトゥス論、ヘーゲルの欲望論や承認論、現象学的な身体論、フーコー的な権力論を通過するなかで、ジェンダー論者としてのバトラーが身体についてどのような思索を展開したのかを示すという意味できわめて説得的であるとともに、バトラーの思考のさらなる潜在力

を掘りおこすものであるといえる。こうした記述を受けながら、申請者はバトラーの目指す共同体の思考を論者は独自の方向でまとめようとしている。これら一連の議論は、二一世紀になって、ジェンダーの議論よりも広汎な政治的トピックについて発言するバトラーの思想の今後、あるいはそこでのユダヤ性の問題など、さまざまに分岐する諸テーマを論じていく際にも礎石になるとおもわれる。

以上の各章のもとになる論文の多くは、すでに学会誌そのほかにおいて発表されたものであり、査読付論文を含むものである。また論者はすでに多くの学会そのほかでワークショップなどの発表をおこなっている。また本論で論じられている多くのバトラーの論文には未訳のものが多く含まれ、海外論文の参照も充分になされていることから、語学力という点からも十分なものがあると考えられる。

よって本論は博士(人間科学)を付与するのにふさわしい論文であると判断される。